

女子青年における“乳幼児期から現在までの親との関係”と“養護性” — 回顧法による生育史の分析をもちいて —

岩治 まとか*

井森 澄江**

Nurturance in adolescent women and their relationship to parents from infancy up
to the present time by a method of retrospective life history

Madoka IWAJI

Sumie IMORI

要 約

本研究の目的は、女子大学生によって書かれた生育史をもちいて、乳幼児期、小学校期、中高校期、大学期（現在）の親との関係を明らかにすること、そして各時期の親との関係と現在の養護性がどう関係しているかを明らかにすることであった。

調査対象は206名の女子大生である。調査の質問紙は養育養護に関する質問項目、愛着に関する質問項目のほか、4つの時期が「どのような時期だったか」、「どのように育てられ、それをどう感じていたか」、「どんなことがあったか」などの自由記述を求める設問からなる。

質問紙から6因子からなる養護性尺度が構成され、生育史から分析された各時期の親子関係の質と構成した養護性尺度の関連が検討された。その結果、乳幼児期や小学校期において親との間に良好な関係が築けている人は、親に対してポジティブで安定したイメージを持ち、養護性に対する構えも高いことが示唆された。

キーワード：養護性、女子青年、親子関係、生育史

問題と目的

養護性の形成を明らかにしようとする研究はこれまで妊娠・出産してからの意識の変化（中西・栗津・小嶋, 1992、栗津・中西・小嶋, 1993等）、青年期の親準備性（井上・深谷, 1983、伊藤, 2003等）、幼児・児童の養護性の発達（小嶋・河合, 1988等）等々のさまざまな観点から行われてきたが、その多くは養護性と親との愛着との関連を指摘している。青年期の親準備性の形成に影響を与える要因を検討した井上ら（1983）は、両親から愛されたという記憶で占められている子ども時代、心理的安定感のある家庭で育った経験な

どをあげている。また George&Solomon（1996、1999）は、養護性の発達にとって青年期の重要性を指摘するとともに、親との愛着関係が養護性を作り上げることになるとして次のような理論を提出している。「養育行動は愛着と独立にそれ自身組織された、しかし、発達的にまた行動的にリンクした行動システムとして組織化されている。そして養育行動を導き出す養育表象の構築はそのスピードや敏感期は異なるものの愛着表象の構築と対応して進行していく。養育表象の構築にとっての最初の敏感期は青年期である。青年期には養育表象システムを自分の中に構築するプロセスの一部として、‘守る’といった養育者としての自分の表象を、‘守られる’といった愛着する子どもの表象に対応させつつ、作り上げていく

* 東京家政大学文学部心理教育学科 心理教育
学科資料室

** 東京家政大学文学部心理教育学科 発達心理
研究室

ことになる。」

筆者らも養護性の形成を青年期の重要な課題として捉え、青年期の養護性に関しての尺度の構成を試みるとともに、青年後期の養護性が乳幼児期から現在までの親子関係、すなわち愛着や親の養育態度・行動とどのように関連しているのかを検討してきた。岩治（2005）では、これまでの研究成果を踏まえて、青年期の養護性尺度を作成し、就学前の母子関係尺度（酒井，2001）、成人愛着内的ワーキングモデル尺度（戸田，1988）との関連を検討し、男子青年の養護性は現在の内的ワーキングモデルと関係が深いこと、女子青年の養護性は就学前期の母子関係と関係が深いことを報告した。井森・大井（2006）は、岩治（2004）の養護性尺度を用いて養育のみでなく介護を含む青年女子の養護性に関して就学前、現在の愛着に加え中高校期の愛着（IPA）と親の養育態度の認知（PBI）との関連を検討した。これらの研究では、すでに作成されている愛着尺度を用い、養護性尺度との関係をみるという手法をとってきた。この手法によりいくつかの興味ある結果を得ることはできたが、いくつかの問題点も含んでいた。もっとも大きな問題は、愛着尺度が開発されていない児童期が検討対象から抜けてしまうということであった。また、現在の愛着を測定する内的ワーキングモデル尺度では対人関係を測定し得ても、親との愛着関係そのものを抽出することは難しいということも問題であった。児童期を含め各時期の愛着を同一の親子関係の観点から捉えた上でなければ、これまでの親との愛着関係がどのように青年期の養護性の形成に関わっているのかを明確にすることはできないと思われる。そこで今回は、乳幼児期から現在までの親との愛着関係を生育史の中で捉える、山岸が開発した回顧法（山岸，2000 参照）を用いることにした。現在ま

での親との関係を含む対人的環境を回顧し記述した生育史を分析し、各時期の親との関係—安定か不安定か、どのような問題を持つのか—を明らかにした上で、養護性との関連を検討していく。

本研究の目的は、1）青年後期の女子青年が乳幼児期から現在までの対人的環境を回顧し記述した生育史を分析し、各時期の親との関係をどうとらえているのか（各時期の親との関係の認知）、それらはどう変化するのか（関係の変化パターン）を明らかにすること 2）青年期女子の養護性尺度を作成し、青年期の養護性と1）で明らかにした各時期の親との関係の認知および関係の変化パターンとがどのように関連するのかの検討を行うことである。

方法

1. 対象：首都圏内女子大学 2～3 年生 206 名（年齢 19～20 歳）
2. 実施時期：2007 年 8 月初旬
3. 調査方法：夏休み前の教職課程の授業の最後に受講生 220 名に質問紙を配布、協力を依頼し、配布当日中に回収した（その際、書きたくないことは書かなくてよいことを伝えた。また協力を承諾したもののみ提出してもらった）。回収率 94%
4. 調査用紙の内容：質問紙は無記名方式であり、年齢・きょうだい関係などを含むフェイスシートと次のような自由記述式および選択肢式 5 つの設問からなる。

[自由記述式設問]

- (1) これまでの対人的環境：幼少期から今までどのように育てられたか、周りの人はどんな意味をもっていたか等についての自由記述。山岸（2000）を参考に作成した。具体的には A4 の用

紙を2×3の欄に分割したもの2枚分に、4つの時期－乳幼児期、小学校期、中高校期、現在（大学）－それぞれに関して3つの設問（1. どのような時期だったか、どのように育てられ、それをどう感じていたか 2. どんなことがあったか 3. 自分にとって周りの人はどんな意味をもっていたか、誰が自分にとって重要だったか）について自由に記述してもらった。

- (2) 褒められたこと・叱られたこと：幼少期から今までを思い返して、両親から褒められて印象に残っていること・叱られて印象に残っていることを、その時期（何歳頃）およびその時の気持ちとともに自由に記述してもらった。また子どもの頃好きだった遊びについても記述してもらった。

[選択肢式設問]

- (3) 両親の子育て方針・価値観：子どもの頃、両親はどのような価値観や子育て方針を持っていたと思うかを7つの分類（学校に關係する能力、従順、礼儀、情緒的成熟・自立、社会的スキル、その他）（柏木，1988）から強い順に3つ選んでもらった。

- (4) 養護性に関する質問項目：中西・栗津（1997）の養護性尺度 61 項目のうち 52 項目、小野寺（2003）の可能自己尺度 7 項目のうち 6 項目、伊藤（2003）の子ども・子育てに関する意識尺度 8 項目のうち 2 項目、伊藤（2003）の同性の親への同一視・性受容尺度 3 項目の計 63 項目からなる。各項目について、「1. 全くそう思わない」から「6. 非常にそう思う」までの 6 段階で評定してもらった。

- (5) 愛着に関する質問項目：内的作業モデル（IWM）尺度（戸田，1988）18 項目（安定尺度 6 項目、アンビバレント尺度 6 項目、回避尺度 6 項目）と就学前の母子關係に関する項目（酒井，

2001）16 項目のうちの 9 項目（就学前の安定的な母子關係尺度 3 項目、就学前の拒否的な母子關係尺度 3 項目、就学前のアンビバレントな母子關係尺度 3 項目）の計 27 項目からなる。各項目について、「1. 全くそう思わない」から「6. 非常にそう思う」までの 6 段階で評定してもらった。

5. 本研究で分析する設問：本研究では主に設問(1)と(4)の回答について分析を行う。そこで、質問紙で用いた(1)の実際の設問を以下に示す。

あなたの「乳幼児期」「小学校時期」「中学・高校生時期」「大学生以降」について各時期がどんな時期だったか。また各時期においてどんなことがあったか、具体的なエピソード。さらに、各時期において誰が最も重要な他者だったかについて、記入してください。

- ・どんな時期だったか 例) どんな赤ちゃん、どんな幼児・・・どのように育てられ、それをどう感じていたか
- ・どんなことがあったか 例) 自分にとって重要だったこと、楽しかったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、イヤだったこと、つらかったこと
- ・自分にとって周りの人（母親、父親、きょうだい、祖父母、友人、先生）はどんな意味をもっていたか。誰が自分にとって重要だったか

結果と考察

1. 乳幼児期から現在までの親との關係

206 名のうち設問(1)に何らかの記載があったものは 186 名であった。

- (1) 各時期における重要な人物（各時期の総数 186 名）

設問(1)の3. の誰が自分にとって重要だったかについて、①家族全員、②両親、③父、④母、⑤祖父母、⑥祖父、⑦祖母、⑧きょうだい、⑨兄、⑩姉、⑪弟、⑫妹、⑬先生、⑭友達、⑮彼、恋人、⑯その他の人(近所の人、曾祖母、叔母など) ⑰みんな、きめられない、以外に⑱わからない⑲誰も重要でない、という記述(複数回答あり)がみられた。なお各時期 31～52 人は⑳未記入であった。

表1は各時期上位4位の項目(4つの時期のいずれかで上位4位までに入っている項目)の列挙数である。

一番に挙げられるのは乳幼児期では④母親が75名(総数の40%、記載者の48%)と断然多いが、小学校期では④母親40名(総数の22%、記載者の28%)③友達31名(総数の17%、記載者の22%)が多く、中高校期には③友達73名(総数の39%、記載者の48%)④母親34名(総数の18%、記載者の22%)と順位が逆転している。なお、乳幼児期に重要な人として家族・両親・母親①②④を挙げているのは126名(総数の68%、記載者の81%)(未記入⑳31名)。①②④が全く無いのは29名(総数の16%、記載者の19%)で、そのうち3名は父③、13名は祖父母⑤⑥⑦を挙げているので、①～⑦が全く無いのは13名(総数の7%、記載者の8%)である。これまでの研究に見られるように本研究においても重要人物は乳幼児期では養育者、多くは母親、児童期には、仲間へと広がりを見せ、青年期には仲間へと移行している。

なお、乳幼児期・小学校期・中高校期・大学期(現在)の4期すべてにおいて、一番に④母親を挙げているものが9名(総数の5%)みられた。そのうちの2名は((2)で述べる親との関係に関して)中高校期に父親との関係に問題があった。それ以外の7名にはどの時期にも問題は見られな

かった。

(2) 各時期における親との関係とその変化

記述は、家族関係に関するもの以外にも、学校での出来事や対人関係に関するものがみられたが本研究では家族関係に関するもの、主に親との関係に関するものをとりあげる。

1) 親との関係の分類

親との関係の分類カテゴリーはアタッチメントの3つの型を考慮しながら設定された山岸(2000)を基に作成した。山岸の分類は、本人がどう認知しているかに基づくものであり、無意識的なものも含め研究者が査定する成人アタッチメントとは異なっているが、Aは安定した愛着関係のあり方、BのⅠ～Ⅳは愛着に関する葛藤のあるアンビバレントのあり方、BのⅣ～Cは愛着関係からの回避のあり方にほぼ対応している(BのⅣはアンビバレントの場合と回避の場合があると考えられる)。

山岸(2000)ではCに3つの下位分類—Ⅰ情緒性が少ない、Ⅱ母親に関する記述が不自然に少ない、Ⅲ他の対象に愛着を向ける—を設けているが、今回は、Ⅱを特定することができなかったため、CⅡは設定しなかった。また山岸の分類にはなかった家族内の人間関係の問題が述べられているものがあったので、今回それをDとした。BCDは問題のある関係といえる。

表1 各時期重要な人
一番に挙げた人数(二番目以降も合わせて挙げた人数)

	乳幼児期	小学校期	中高校期	大学期
①	17 (18)	19 (22)	8 (14)	13 (30)
②	14 (18)	7 (10)	14 (17)	23 (29)
④	75 (87)	40 (48)	34 (40)	21 (27)
⑦	10 (20)	2 (3)	1 (2)	0 (0)
⑬	2 (11)	16 (27)	11 (30)	1 (3)
⑭	6 (12)	31 (59)	73 (95)	59 (84)
⑳	31	43	34	52

なお、今回は学校での出来事や対人関係に関するものが述べられ、家族関係が述べられていないものがかなりみられたが、特別な問題が語られないということで、A に準ずるものとした。また、記述の全くないものを、N とした。

表 2 に各カテゴリーとその該当例（乳幼児期・小学校期、中高校期・大学期各 1 例ずつ）をあげた。

2) 各時期の親との関係の全体的推移

4 つの時期別に各カテゴリーに分類された人数を表 3 に示した。親に関係した記述には 2 つ以上のカテゴリーにまたがるもの〔例えば、中高校

期「親のしつけが厳しく、他の子と同じようにできなくて、家ではいつも不機嫌、反発」B II と B I〕があったが、今回は主カテゴリー〔例の場合 B I〕のみに分類することとした。即ち、一人につき各期 1 カテゴリーに分類した。

乳幼児期 135 名 (73%)、小学校期 136 名 (73%)、中高校期 129 名 (69%)、大学期 125 名 (67%) とどの時期も 70% 前後が A 肯定的関係となっている。山岸 (2000) では肯定的関係が占める割合は 23% (中学校期) ~ 65% (大学期) であり、山岸 (2000) と較べて、今回は A 肯定的関係が多くなっている。これは今回、学校での出来事や対

表 2 関係カテゴリー 「 」 反応例 (1 例目乳幼児・小学校期 2 例目中高校・大学期)

A 安定した良好な関係：各時期に応じた安定した愛着関係をもつもの

B 問題のある関係：問題や葛藤がある関係

I 反発、反抗

「なまいきで、家族と喧嘩していらいらしていた。自分の思い通りにならず家出」

「中学の時は反抗期で母としょっちゅうけんかしていた」

II 親の統制、コントロールが強い、厳しい

「教育に対して厳しく育てられた。テストを持って帰るのが怖かった」

「スーパー過保護」

III 分離不安

「親がそばにいないと不安だった」

「一人暮らしが寂しい」

III' 愛情欲求

「弟が生まれ両親をとられてしまったようで悲しかった」

「自主性に任され、物足りなさを感じた」

IV 拒否されている、愛されていない

「母は兄が好きで、いつも兄が優先されて嫌いだった」

「親も自分を理解してくれないと思うようになった」

V 回避、嫌悪、意味を認めない

「家族が嫌いだった」

「母親イヤな存在」

C 関係性の希薄 (他の対象に愛着をむける、情緒性が少ない)

I 情緒性が希薄

「覚えていない」

「関係が遠くなった人母親」

III 他の対象に愛着を向ける

「お母さんに怒られるといつも祖母に慰めてもらった。祖母が遊び相手だった」

D 家族内の人間関係の問題

「祖父母がかわいがってくれすぎ、母戸惑う。家族関係壊れる」

N 記載なし

注) C II は設定しなかった

人関係に関するものが述べられ、家族関係が述べられていないものも、特別な問題が語られないということで、Aに準ずるものとし、Aに含めたことによると思われる。小学校期、中高校期では特に学校に関する記載が多かった。また、(質問紙当日回収という時間的制約の中で質問紙の最後に置かれた)大学期で、記載無しが他の期より多くなっていることは、山岸(2000)にみられた大学期での特徴(他の時期に比べてA肯定的関係の割合が多い)が今回は示されなかったことと関連していると思われる。

A肯定的関係から親との関係の全体的推移を見ることが、上に述べたような理由から、今回はむずかしい。そこで、各時期の問題のある関係(BCD)を中心に全体的推移を見ていく。

乳幼児期は問題のある関係は33名(18%)と中高校期に続いて多い。問題のカテゴリーをみると、BⅢ分離不安(「母親と少しでも離れることがつらかった」「親戚の家へ行っても親、きょうだいがそばにいないと不安、寂しい」など親から離れることの不安感)とBⅢ'愛情欲求の問題が圧倒的に多く、各14, 11名である。BⅢ'愛情欲求は「長女なので大切に育てられたが、家に祖父母しかおらず、寂しかった」というような現実と与えられていた以上の愛情を求めるもの、「弟誕生にやきもち」「兄を優先されることが多くて嫌だった」というきょうだいをめぐり問題が多い。また乳幼児期はC関係性の希薄が3名みられるが、これは「記憶がない」2名と「一番かわいがってくれるおばさんが好きだった」という親以外に愛着をむけていた1名である。ほかにBI反発、反抗 BⅡ統制・厳しい BⅣ愛されていない BⅤ回避、嫌悪 D家族内の人間関係の問題が各1名みられた。

小学校期は問題のある関係は27名(15%)と

乳幼児期より少なくなっている。問題のカテゴリーではBⅡ統制・厳しいが12名と圧倒的に多く「よく父母にしかられていた」という一般的な言及のほかに、「教育に関して厳しく育てられた。テストを持って帰るのが怖かった。なぜ70点でおこられるのか全くわからない」「親から勉強のことを言われるのがいやだった」という教育に関するもの、「よその人の前で不機嫌そうな顔をしたり、態度が悪くて母にしかられた」としつけに関するものがみられた。つぎに多いのはBⅢ'愛情欲求「妹や弟で、母の愛情が少し離れていくことが寂しかった」などきょうだいをめぐり問題が乳幼児期に引き続き見られた。ただし、人数は4名と乳幼児期にくらべて少なくなっていた。BⅤ回避、嫌悪は3名に見られたが、「家族が嫌いだった。誰も重要でなかった」「あまり家の中が好きでなかった」という家族全体に対する嫌悪と「父親が嫌いだった」という父親の対するものが見られた。なおBⅡ統制・厳しいの中にも父親に限定するものが1名あった。ほかにBI反発、反抗 CI関係性の希薄 D家族内の人間関係の問題が各2名、BⅢ分離不安 BⅣ愛されていないが各1名あった。

中高校期は問題のある関係は43名(23%)と4期の中で一番多い。問題のカテゴリーでは「反抗期に入り、親(特に母親)に干渉して欲しくなかった」に代表されるBI反発、反抗が22名と問題の半数を超えるが、「高校時は親が厳しかった」「親からの干渉、不快」などBⅡ統制・厳しいも13名にみられ、自立をめぐる親との感情的対立がこの期の大きな問題となっていることがわかる。BⅤ回避、嫌悪 CI関係性の希薄は各3名にみられた。BⅤ回避、嫌悪に関しては「父嫌い」等ここでも父親に限定するものがあった。ほかにBⅢ'愛情欲求 BⅣ愛されていないが各

1名あった。

大学期（現在）は問題のある関係は15名（8%）と4期の中で一番少ない。また問題のカテゴリーでは「スーパー過保護」「親にはそろそろもっと自由にしてほしい」といったBⅡ統制・厳しい、「一人暮らしが寂しい」「ホームシック」などBⅢ分離不安が各4名で一番多いが、その内容は問題としては程度の弱いものとなっている。またBⅢ「愛情欲求」の1名も問題としては程度の弱いものとなっている。ただCⅠ関係性の希薄については、「現実逃避をして家とは関わりを持っていない」「尊敬できる父親、関係が遠くなった人母親」等が見られ、問題の程度がすべてのカテゴリーで弱くなっているとは限らない。BV回避、嫌悪でも「母親イヤな存在」等の記述が見られた。なお、A肯定的関係に分類されるものの中に、「親が自分で決定することを許してくれた」「門限がゆるくなり生活しやすい」「厳しかった親が何も言わなくなり、友達の家に泊まったり、バイトを始めて人見知りが直った」「両親と素直に接することができる」など、親との関係が再構成化されている様子や、「一人暮らしをするようになって、親のありがたさを実感した」「自立生活を始めて、親

きょうだいの存在の大きさにきづく」など親からの自立とともに感謝の気持ちを示すものが多く見られた。親との関係の再構成化は中高校期の記述の中で、「中学は部活と友達という以外はつまらない毎日。高校はとても楽しかった。親にもあまりおこられなくなった」など特に、高校生の時と限定されて記述されたものにもみられており、青年期後期の特徴としてこれまでの研究で示されている知見と一致している。

3) 親との関係のパターン

4期の親との関係の推移を、各期が肯定的関係（問題がない）か問題のある関係か、の観点から個別に見ていく。4期（乳幼児期・小学校期・中高校期・大学期）の関係は16通り考えられるが、今回は「中高校期に肯定的関係で、乳幼児期・小学校期・大学期で問題のある関係（△△○△）パターン」はみられなかった。そこで表4に、A（Aに準ずるものを含む）を肯定的関係として○で、BCDを問題のある関係△として各期の関係を示すこととして、みられた15通りのパターンのうち、4期とも肯定的関係（○○○○）パターンを除いた、14種類の親との関係パターンとその人数を示した。

表3 4つの時期別親との関係

関係カテゴリー	乳幼児期	小学校期	中高校期	大学期
A 肯定的関係（Aに準ずるものを含める）	135	136	129	125
BⅠ反発、反抗	1	2	22	2
Ⅱ統制・厳しい	1	12	13	4
Ⅲ分離不安	14	1	0	4
Ⅲ「愛情欲求	11	4	1	1
Ⅳ愛されていない	1	1	1	0
V回避、嫌悪	1	3	3	1
CⅠ関係性の希薄	2	2	3	3
Ⅲ他に愛着	1	0	0	0
D家族内の人間関係の問題	1	2	0	0
〔BCD小計〕	〔33〕	〔27〕	〔43〕	〔15〕
N記載なし	18	23	14	46
（計）	（186）	（186）	（186）	（186）

表 4 関係パターン (人数)

a) △○○○ (12)	h) ○△○○ (6)
b) △△○○ (3)	i) ○△△○ (8)
c) △△△○ (5)	j) ○△△△ (1)
d) △△△△ (1)	k) ○△○△ (3)
e) △○△○ (6)	l) ○○△○ (20)
f) △○△△ (1)	m) ○○△△ (1)
g) △○○△ (5)	n) ○○○△ (3)

14 パターンの人数合計は 75 名で、40%が 4 期のどこかの時期で問題を感じている。

最も多くみられたパターンは中高校期のみに問題が見られる l) 20 名であった。そしてその問題の殆どが B I 反発・反抗である。次に乳幼児期のみに問題が見られる a) 12 名が多く、その殆どが B III 分離不安、B III 愛情欲求である。

そして、問題が小学校期・中高校期の 2 期にわたる i) 8 名が次に続く。このパターンでは B II 統制・厳しいが 2 期ともにみられるものと B III 分離不安、B III 愛情欲求から B I 反発・反抗に問題が変わるものが主に見られた。

これら l) a) i) で主に見られたものは、愛着に関する葛藤があるアンビバレンスのあり方に対応する問題であった。

これに対して、乳幼児期に問題があり後の期にも問題が見られる b) c) d) パターンでは乳幼児期の問題として C I 関係性の希薄、C III 他の対象に愛着を向ける、B V 回避、嫌悪という愛着関係からの回避のあり方に対応する問題と D 家族内の問題が多く見られた。

2. 養護性と乳幼児期から現在までの親との関係

206 名のうち、(4) 養護性に関する質問項目に無回答の多い 2 名を除く 204 名を分析対象とした。

(1) 養護性尺度について

養護性に関する質問項目 63 項目について、スクリープロットと解釈可能性を考慮して因子数を 6 因子に固定し、各項目の因子負荷量がひとつの因子に .40 以上、他の因子に .35 未満になることを基準とし、主因子法プロマックス回転により因子分析を繰り返し行った。

結果、41 項目 6 因子が抽出され、全分散の 47.76%が説明された。各因子における項目ごとの因子負荷量は、表 5 に示す通りである。

第 1 因子で負荷量が高かった項目には、“子どもはあまり好きではない”“幼児の姿をつい目で追っていることがある”などの 17 項目で、「子ども・赤ちゃんへの関心」と命名した。第 2 因子では、“自分の母親のようにになりたい”“自分は良い母親を持ったと思う”などの 8 項目において因子の負荷量が高く、「親に対するポジティブな感情」と命名した。第 3 因子では、“将来、親になった時のことを想像することがある”“自分は子どもを育て良い親になろうと思っている”をはじめとする 8 項目が抽出され、「将来の子育てに対するポジティブな予測」と命名した。第 4 因子で負荷量が高かった項目は、“人からよく「世話好き」であるといわれる”“小さい子どもの世話には自信がある”などの 5 項目で、「世話に対するポジティブな感情」と命名した。第 5 因子では、“将来、子どもをうまく育てられるか心配である”“将来、泣く赤ちゃんを目の前にして途方に暮れている自分を想像する”などの 4 項目で因子の負荷量が高く、「将来の子育てに対するネガティブな予測」と命名した。第 6 因子では、“趣味で作品を一つ一つ増やしていくことに喜びを感じる”“草花を育てることに興味がある”などの 4 項目が抽出され、「植物への関心・制作への喜び」と命名した。これまでの研究で明らかになっているように、青年期における養護性の構成成分

表5 養護性(41項目)の因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V	VI
I. 子ども・赤ちゃんへの関心 (12項目) $\alpha = .87$						
12. 子どもはあまり好きではない	-.77	.11			.13	
14. 幼児の姿をつい目で追っていることがある	.71					
24. 小さい子どもに関心がある	.68					
8. テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもってみる	.67	-.12				
4. 赤ん坊の泣き声を聞くとイライラすることがある	-.61			.16	.15	.11
17. 子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい	.58			-.20	.21	
1. 赤ちゃんを見ても、別にかわいいとは思えない	-.57	.21				
10. 幼い子どもが泣いていると何とかしたいと思う	.56					.22
9. 子どものころの動きに興味がある	.54					.29
32. 幼い子どもに接する職業に関心がある	.53	.26	.17			-.19
23. 保育所や幼稚園の前を通りかかると中をのぞきたくなる	.50			.22	.14	
6. 幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.49	-.11	.12	.16	.10	
II. 親に対するポジティブな感情 (8項目) $\alpha = .90$						
36. 自分の母親のようにになりたい		.86				
39. 自分は良い母親を持ったと思う		.85	-.11			
55. 親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい		.84				
45. 母親は自分の気持ちをよく理解してくれた		.75				
48. 親が自分にしてくれたことをいろいろ思い出す		.73				.20
53. 母親について良い思い出があまり浮かばない	-.17	-.71		.11		
60. 以前に親と楽しく過ごしたときのことを思い出す		.66			.12	
57. 父親は自分をかわいがってくれたと思う	-.18	.40	.23			
III. 将来の子育てに対するポジティブな予測 (8項目) $\alpha = .83$						
21. 将来、親になった時のことを想像することがある	-.15	.80			.11	
49. 自分は子どもを育て良い親になろうと思っている		.75				-.14
51. 将来、育児を楽しんでいる自分の姿を想像することがある		.71				.12
42. 出来れば自分も親となって子どもを育てようと思う	.14	.65				-.13
35. 女に生まれてよかったと思う	-.21	.10	.56	-.10		
38. 将来、自分の時間(趣味など)を楽しんでいる自分の姿を想像する	-.12	.50				.14
61. 自分は将来、我が子に慕われる親になれる気がする	-.17	.12	.44	.26	-.19	
25. 将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想像する	.24	.43	.17			
IV. 世話に対するポジティブな感情 (5項目) $\alpha = .80$						
41. 人からよく「世話好き」といわれる		.12	-.21	.74	.10	
28. 小さい子どもの世話には自信がある			.16	.73		
2. 幼児の相手をうまくやれると思う		-.17	.10	.72		-.10
3. 小学生の遊び相手になれそうである				.64	-.21	.11
26. 人の世話が好きである	.12			.56		
V. 将来の子育てに対するネガティブな予測 (4項目) $\alpha = .72$						
58. 将来、子どもをうまく育てられるか心配である					.65	
46. 将来、泣く赤ちゃんを前にして途方に暮れている自分を想像する					.65	
34. 将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する			.34	-.25	.60	
40. 将来、毎日の生活に疲れ果てイライラしている自分を想像する	-.14			.20	.57	
VI. 植物への関心・制作への喜び (4項目) $\alpha = .65$						
13. 趣味で作品を一つ一つ増やしていくことに喜びを感じる						.67
11. 草花を育てることに興味がある						.59
30. 「手作り」のものが好きである						.50
27. 枯れかけている植物を見ると気がかりである		.13				.47
因子間相関						
I. 子ども・赤ちゃんへの関心	1					
II. 親に対するポジティブな感情	.25	1				
III. 将来の子育てに対するポジティブな予測	.47	.38	1			
IV. 世話に対するポジティブな感情	.49	.41	.48	1		
V. 将来の子育てに対するネガティブな予測	-.00	-.14	-.06	-.13	1	
VI. 植物への関心・制作への喜び	.33	.16	.26	.29	.20	1

注) 負荷量が.10未満のものは表示していない

の中心は、「赤ちゃんや子どもへの関心」「子どもを上手く扱える自信」「積極的な養育的役割の受容」である。本研究においてもこれらの主要な因子と同様の因子のまとまりが確認されたことから、あらためてこの3因子が青年期における養護性の構成要因の中核を担っていることが示唆された。

各尺度の α 係数は、子ども・赤ちゃんへの関心： $\alpha = .87$ 、親に対するポジティブな感情： $\alpha = .90$ 、将来の子育てに対するポジティブな予測： $\alpha = .83$ 、世話に対するポジティブな感情： $\alpha = .80$ 、将来の子育てに対するネガティブな予測： $\alpha = .72$ 、植物への関心・制作への喜び： $\alpha = .65$ となり、尺度内の整合性はほぼ満足できるものが得られた。これらのことから、養護性の尺度として「子ども・赤ちゃんへの関心」「親に対するポジティブな感情」「将来の子育てに対するポジティブな予測」「世話に対するポジティブな感情」「将来の子育てに対するネガティブな予測」「植物への関心・制作への喜び」の6因子を養護性を構成する因子ととらえ、それぞれの因子で項目の得点を合計することに、大きな問題はないと言える。

そこで、各因子の尺度得点を、6因子それぞれについて各因子に分類された項目の得点を合計することによって算出した（表6）。

また、斜交回転によって得られた因子間相関は

表5に示す通り、弱から中程度の相関であったが、各因子間での関連の程度をみるために、因子ごとの項目の合計得点の相関係数を検討した（表7）。

その結果、「子ども・赤ちゃんへの関心」では「将来の子育てに対するネガティブな予測」以外の全ての因子間で弱から中程度の正の相関がみられた。「親に対するポジティブな感情」では、「植物への関心・制作への喜び」以外の因子間で正の相関がみられ、「将来の子育てに対するポジティブな感情」では、「将来の子育てに対するネガティブな予測」以外の全ての因子間で正の相関がみられた。また、「世話に対するポジティブな感情」では、「子ども・赤ちゃんへの関心」（ $r=.47, p<.01$ ）、「親に対するポジティブな感情」（ $r=.35, p<.01$ ）、「将来の子育てに対するポジティブな予測」（ $r=.42, p<.01$ ）、「将来の子育てに対するネガティブな予測」（ $r=.19, p<.01$ ）、「植物への関心・制作への喜び」（ $r=.21, p<.01$ ）の全ての因子間で弱から中程度の正の相関がみられた。「将来の子育てに対するネガティブな予測」では「親に対するポジティブな感情」（ $r=.17, p<.05$ ）、「世話に対するポジティブな感情」（ $r=.19, p<.01$ ）の間に正の相関がみられ、「植物への関心・制作への喜び」では「子ども・赤ちゃんへの関心」（ $r=.29, p<.01$ ）、「将来の子育てに対するポジティブな予測」（ $r=.24, p<.01$ ）、「世話に対するポジティブな感情」（ $r=.21, p<.01$ ）との間

表6 下位尺度得点

	尺度得点	標準偏差
子ども・赤ちゃんへの関心（12項目）	63.85	6.02
親に対するポジティブな感情（8項目）	37.70	6.69
将来の子育てに対するポジティブな予測（8項目）	38.79	5.00
世話に対するポジティブな感情（5項目）	21.68	3.73
将来の子育てに対するネガティブな予測（4項目）	14.94	3.17
植物への関心・制作への喜び（4項目）	16.59	3.00
養護性（41項目）	193.55	17.46

注）尺度得点は、各因子に分類された項目の得点を合計したものである

に正の相関みられた。また、養護性全体と各因子間でも全ての因子間で強い正の相関が認められ、養護性尺度として妥当であることが示された。

これらのことから、「幼い子どもや赤ちゃんに興味を持ち」子ども好きであることは、「子どもの相手が上手くできるという自信」につながり、さらに「子どもを育てよい親になろう」とする構えと結びついて、青年期（未婚の大学生女子）における、養護性の構成成分の核をなすと言える。また、親に対して良いイメージを持っていることは、世話や子育てが上手く出来るという自信に繋がることが示唆された。

なお、今回の研究における尺度間相関の符号がこれまでの養護性研究のものと異なるのは、逆転項目の得点を逆にして計算したためである。

(2) 養護性と乳幼児期から現在までの親子関係との関連

養護性が乳幼児期、小学校期、中高校期、現在（大学期）における親子関係を中心とする対人関係の認知とどのように関係するかについて、設問

(1) これまでの対人的環境：幼少期から現在までの親子関係についての回顧法による自由記述で得られた親との関係と、養護性尺度の得点について検討をおこなった。

1) 乳幼児期における重要な人物と養護性との関連

① 重要な人物について記載のあった群(154名)のなかで、重要な人物を「母」と記入した群と「母以外」の人物を記入した群との間に、養護性の下位尺度得点に差がみられるかどうかについて、2群による平均値の差の検定をおこなった。結果（表 8）、重要な人物を「母」と記

表 7 各因子を構成する項目合計得点間の相関係数

	子ども・赤ちゃんへの 関心	親に対する ポジティブ な感情	将来の子育 てに対する ポジティブ な予測	世話に対す るポジティ ブな感情	将来の子育 てに対する ネガティブ な予測	植物への関 心・制作へ の喜び
親に対するポジティブな感情	.24**					
将来の子育てに対するポジティブな予測	.41**	.40**				
世話に対するポジティブな感情	.47**	.35**	.43**			
将来の子育てに対するネガティブな予測	.05	.17*	.08	.19**		
植物への関心・制作への喜び	.30**	.12	.24**	.21**	-.13	
養護性	.72**	.71**	.73**	.70**	.30**	.41**
					*p<.05	**p<.01

表 8 重要な人物を「母」「母以外」と記載した群による養護性尺度の比較

		N	平均	SD	t値	自由度	有意確率
子ども・赤ちゃんへの関心	母	75	64.04	5.99	.19	181	0.848
	母以外	79	63.42	6.68			
親に対するポジティブな感情	母	75	38.80	5.98	1.70	181	0.091
	母以外	79	37.90	6.58			
将来の子育てに対するポジティブな予測	母	75	39.45	4.51	1.55	181	0.123
	母以外	79	38.63	5.16			
世話に対するポジティブな感情	母	75	21.52	3.56	-.23	181	0.820
	母以外	79	21.65	3.80			
将来の子育てに対するネガティブな予測	母	75	14.88	3.30	-.17	181	0.862
	母以外	79	14.99	3.19			
植物への関心・制作への喜び	母	75	16.63	2.98	-.50	181	0.615
	母以外	79	16.77	2.73			
養護性	母	75	195.32	16.32	.98	181	0.327
	母以外	79	193.36	17.90			

入した群と「母以外」を記入した群との間に、養護性の下位尺度得点に有意な差はみられなかった。

これは、重要な人物に関する記載が自由記述であったことが大きく関連していると考えられる。乳幼児期において2番目に多い記述は、①家族全員であり、3番目に多い記述は②両親であった。このことから分かるように、「母以外」の記述の中には母の存在が含まれるものもあり、重要な人物についての「母」と「母以外」を明確に分けることが出来なかったからではないかと考えられる。

- ② 重要な人物についての記載があった154名を、重要な人物を「母」「父」「祖父母」などを含めた「家族」について記入した群と、「家族

以外」の人物を記入した群に分け、養護性の下位尺度得点についてt検定をおこなった。その結果(表9)、この2群について養護性の下位尺度得点に有意な得点の差は見られなかった。しかし、「世話に対するポジティブな感情」の得点において、重要な人物について「家族」と記入した群の得点が高い傾向を示した($t(152)=1.86, p<.10$)。

乳幼児期における重要な人物の存在は、いつも近くで見守ってくれていたり、直接自分の世話をしてくれる身近な人を連想する可能性が高いと考えられる。このような存在は、「家族」であり、自分の世話をしてくれる人物であることから、「家族」に関しての記述において、「世話に対するポジティブな感情」の得点が高い傾

表9 重要な人物を「家族(母・父・祖父母など)」「家族以外」と記載した群による養護性尺度の比較

		N	平均	SD	t値	自由度	有意確率
子ども・赤ちゃんへの関心	家族	141	63.59	6.16	.85	152	0.396
	家族以外	13	65.15	8.22			
親に対するポジティブな感情	家族	141	38.39	6.17	-.31	152	0.755
	家族以外	13	37.81	7.98			
将来の子育てに対するポジティブな予測	家族	141	38.99	4.91	.39	152	0.696
	家族以外	13	39.54	4.43			
世話に対するポジティブな感情	家族	141	21.42	3.64	1.86	152	0.065
	家族以外	13	23.38	3.69			
将来の子育てに対するネガティブな予測	家族	141	15.01	3.29	-.91	152	0.364
	家族以外	13	14.15	2.54			
植物への関心・制作への喜び	家族	141	16.60	2.77	1.42	152	0.158
	家族以外	13	17.77	3.47			
養護性	家族	141	193.99	16.98	.77	152	0.443
	家族以外	13	197.81	18.95			

表10 重要な人物の記載の有無による養護性尺度の比較

		N	平均	SD	t値	自由度	有意確率
子ども・赤ちゃんへの関心	なし	30	64.90	5.34	1.07	181	0.284
	あり	154	63.72	6.34			
親に対するポジティブな感情	なし	30	34.67	7.59	-2.52*	181	0.013
	あり	154	38.34	6.29			
将来の子育てに対するポジティブな予測	なし	30	37.27	5.63	-1.67	181	0.097
	あり	154	39.03	4.86			
世話に対するポジティブな感情	なし	30	21.53	4.06	.09	181	0.926
	あり	154	21.58	3.67			
将来の子育てに対するネガティブな予測	なし	30	14.83	2.76	-.06	181	0.952
	あり	154	14.94	3.23			
植物への関心・制作への喜び	なし	30	16.97	2.88	.58	181	0.565
	あり	154	16.70	2.84			
養護性	なし	30	190.17	19.75	-.93	181	0.356
	あり	154	194.31	17.12			

* $p<.05$

向が示されたと考えられる。

- ③ 乳幼児期における重要であった人物についての項目に記載があった154名と、記載がなかった30名について、養護性の下位尺度得点に差がみられるかどうか検討するために、各因子の尺度得点を算出し t 検定をおこなった（表 10）。その結果、「親に対するポジティブな感情」の得点において、重要な人物に記載があった群が有意に高い得点を示した（ $t(181) = -2.52, p < .05$ ）。

親に対するポジティブな感情は、子ども時代にうけた養育経験をどのように捉えているかが大きく関連しており、養育経験を肯定的に捉えていることが親に対するポジティブな感情と結びついていることが明らかにされている。このことから、重要な人物について記述しない群の中には、親との関係になんらかの問題や葛藤を抱えている人が含まれている可能性が示唆される。

2) 各時期の問題と養護性との関連

設問（1）これまでの対人的環境：幼少期から現在までの親子関係についての回顧法によ

る自由記述に全く記載のなかった20名を除く、184名（結果1では186名であるが、4）養護性に関する質問項目に無回答の多かった2名を除く）について、各時期における親との関係と養護性との関連について検討した。

乳幼児期において、親との関係に問題がみられた33名と乳幼児期についての記述がなかった17名、問題がみられなかった134名の3群について、養護性の下位尺度得点について平均値の差の検定をおこなった。その結果（表 11）、「親に対するポジティブな感情」の得点に、3群による有意な差がみられた（ $F(2,181) = 4.77, p < .05$ ）。また、Tukey 法による多重比較の結果、記述がなかった群が有意に低い得点を示し、「記述がなかった群」と「問題がみられなかった群」において、有意な差がみられた。

小学校期において、親との関係に問題がみられた27名と小学校期についての記述がなかった22名、問題がみられなかった135名の3群について、養護性の下位尺度得点に差がみられるかどうか分散分析をおこなった。その結果（表 12）、「親に対するポジティブな感情」の得点において、有

表 1 1 乳幼児期の問題の有無と記載なし群による養護性尺度の比較

		N	平均	SD	t値	有意確率	群間比較
子ども・赤ちゃんへの関心	あり	33	63.67	7.71	1.24	0.290	
	記載なし	17	61.76	5.48			
	なし	134	64.25	5.84			
親に対するポジティブな感情	あり	33	37.64	8.57	4.77*	0.010	記載なし<問題なし*
	記載なし	17	33.18	6.71			
	なし	134	38.34	5.87			
将来の子育てに対するポジティブな予測	あり	33	38.94	5.01	3.22	0.025	
	記載なし	17	37.82	5.03			
	なし	134	38.81	5.04			
世話に対するポジティブな感情	あり	33	21.42	3.71	.24	0.787	
	記載なし	17	21.06	3.23			
	なし	134	21.68	3.81			
将来の子育てに対するネガティブな予測	あり	33	14.45	3.49	1.16	0.317	
	記載なし	17	15.88	3.41			
	なし	134	14.91	3.03			
植物への関心・制作への喜び	あり	33	16.45	3.04	1.82	0.165	
	記載なし	17	15.65	1.87			
	なし	134	16.96	2.87			
養護性	あり	33	192.58	17.83	2.35	0.098	
	記載なし	17	185.35	16.73			
	なし	134	194.64	17.45			

* $p < .05$

意な差がみられた ($F(2,181) = 6.14, p < .01$)。また、Tukey 法による多重比較の結果、「記述がなかった群」と「問題がみられなかった群」、「問題がみられた群」と「問題がみられなかった群」との間に、有意な差がみられた。さらに、養護性全体の得点においても有意な差がみられた ($F(2,181) = 3.64, p < .05$)。Tukey 法による多重比較の結果、「記述がなかった群」と「問題がみられなかった群」との間に、有意な得点の差がみられた。

中高校期、現在（大学期）において、親との関係に「問題がみられた群」「記述がなかった群」

「問題がみられなかった群」の3群よる、養護性の下位尺度得点に有意な差はみられなかった。

小学校時期において一番多く報告された問題は「Ⅱ親の統制・厳しさ」であり、親の期待や保護、厳しさを過剰であると捉えることは、親との関係を不良であると感じさせ、親に対するポジティブな感情を低くする要因になっていると考えられる。また、養護性全体において差がみられたことは、現在および過去の安定的な愛着関係が養護性に対してポジティブで安定したイメージをあたえ、アンビバレント的や回避的な愛着関係は、養護性に対してネガティブで不安定なイメージ

表 1 2 小学校時期の問題の有無と記載なし群による養護性尺度の比較

		N	平均	SD	f値	有意確率	群間比較
子ども・赤ちゃんへの関心	あり	27	64.93	5.38	2.81	0.062	
	記載なし	22	61.09	7.79			
	なし	135	64.17	5.97			
親に対するポジティブな感情	あり	27	35.22	7.42	6.14**	0.003	問題あり<問題なし* 記載なし<問題なし*
	記載なし	22	34.68	6.14			
	なし	135	38.74	6.31			
将来の子育てに対するポジティブな予測	あり	27	38.67	4.79	.69	0.501	
	記載なし	22	37.59	5.24			
	なし	135	38.95	5.03			
世話に対するポジティブな感情	あり	27	22.04	2.62	2.21	0.112	
	記載なし	22	20.05	4.24			
	なし	135	21.73	3.79			
将来の子育てに対するネガティブな予測	あり	27	14.19	2.82	.87	0.423	
	記載なし	22	14.95	3.18			
	なし	135	15.06	3.21			
植物への関心・制作への喜び	あり	27	17.19	2.79	.48	0.617	
	記載なし	22	16.41	2.38			
	なし	135	16.71	2.93			
養護性	あり	27	192.22	14.01	3.64*	0.028	記載なし<問題なし*
	記載なし	22	184.77	18.82			
	なし	135	195.36	17.68			

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 1 3 問題のある関係期間の違いによる養護性尺度の比較

		N	平均	SD	t値	自由度	有意確率
子ども・赤ちゃんへの関心	単期	40	63.90	5.98	-.20	72	0.846
	複数期	34	64.18	6.20			
親に対するポジティブな感情	単期	40	39.45	5.61	2.47*	56.97	0.017
	複数期	34	35.35	8.18			
将来の子育てに対するポジティブな予測	単期	40	38.70	5.60	.05	72	0.964
	複数期	34	38.65	4.39			
世話に対するポジティブな感情	単期	40	21.75	3.14	.17	72	0.862
	複数期	34	21.62	3.39			
将来の子育てに対するネガティブな予測	単期	40	14.75	2.83	1.07	72	0.290
	複数期	34	14.00	3.23			
植物への関心・制作への喜び	単期	40	16.68	3.46	-.21	72	0.838
	複数期	34	16.82	2.63			
養護性	単期	40	195.23	16.11	1.22	72	0.226
	複数期	34	190.62	16.26			

* $p < .05$

を与えるという、これまでの研究を支持するものであると言える。また、子ども時代の養育経験をポジティブに捉えていることが、養護性を高めることが支持された。

3) 親子関係のパターンと養護性との関連

各時期における親との関係とその変化について、関係分類カテゴリーの分析から「問題のある関係」が認められた 75 名について、さらに細かくパターンにわけて分類した。その結果、14 種類のパターンが示され、全体の 40%がどこかの時期で問題を感じていることが明らかとなった。問題のある関係がみられた 75 名のうち、ここでは (4) 養護性に関する質問項目に無回答の多かった 1 名を除く 74 名について、問題がみられた時期が「1つの時期」だけの群と「複数の時期」に渡る群の 2 群にわけ、養護性の下位尺度得点に差があるかどうか t 検定をおこなった。

その結果 (表 13)、「親に対するポジティブな感情」の得点において、問題が複数期に渡ってみとめられた群の得点が有意に低いことが示された ($t(56.97)=2.47, p<.05$)。

このことから、親との関係が良好であることが、親に対してポジティブで安定したイメージをあたえ、養育経験を肯定的に受け止めることにつながり、養護性を高めることが示唆された。

まとめ

1. 乳幼児期から現在までの親との関係

- (1) これまでの研究に見られるように本研究においても重要人物は乳幼児期では養育者、多くは母親、児童期には、仲間へと広がりを見せ、青年期には仲間へと移行している。
- (2) 4 期の親子関係のパターンでは青年期のみに問題をもつものが最も多く、その大半は反抗・反発であった。次に乳幼児期のみに問題を

もつものが多く、その殆どが分離不安、愛情欲求で、愛着関係を望みながら不満を感じていた。他方、乳幼児期だけでなく他の時期にわたって問題を持つものは回避、情緒性希薄など愛着関係の意味を認めないもののがかなりみられた。

- (3) 小学校期の問題では親の統制が最も多くみられた。大学期では問題をもつものが少なくなっており、その問題も弱いものがほとんどであった。

2. 養護性と乳幼児期から現在までの親との関係

- (1) 乳幼児期における重要な人物について、自分の世話や養育をしてくれる「家族」について記述した群に、「世話に対するポジティブな感情」が高い傾向が示された。また、乳幼児期における重要な人物に関する記載がない群については、「親に対するポジティブな感情」が低いことが示された。
- (2) 各時期の問題と養護性との関連については、「親に対するポジティブな感情」において、問題がみられなかった群、問題がみられた群、記述がなかった群の 3 群に差が示された。乳幼児期については記述がなかった群、小学校期については問題がみられた群、記述がなかった群に「親に対するポジティブな感情」が低いことが示された。また、小学校期に関して記述のなかった群において「養護性」が低いことが示された。これらのことは、乳幼児期や小学校期において親との間に良好な関係が築けている人は、親に対してポジティブで安定したイメージを持ち、養護性に対する構えも高いことが示唆された。
- (3) 親子関係のパターンと養護性との関連については、問題が複数の時期に渡っている人において「親に対するポジティブな感情」が低いことが示された。このことから、親との関係が

良好であることは、養育経験を肯定的に受け止めていることにつながり、養護性を高めることが示唆された。

今後の課題

今回の研究において養護性の尺度得点が全体的に高かった。これは、対象者が、子ども赤ちゃんへの関心や世話に対する自信がもともと高い、教職課程履修の学生だったことが影響していると考えられる。また、養護性を高める要因として、小さい子どもの世話の経験や、養育に対する学習・実習が関連することが認められており、大学2年生であることから、保育や養育についてかなりの時間学習していることが予想される。また、学習や養育体験は、世話に対するスキルを上げることが予想され、例えば、養育に対してネガティブな意識があったとしても、学習により改善されている可能性が考えられる。

また、上記のような対象者によって作成された尺度であることから、特殊な尺度として成り立っている可能性がある。そのため、今後対象者を広げて青年期において一般的に使える尺度として検討し直す必要である。

付記

今回の調査に協力してくださいました受講生の諸姉に感謝致します。

文献

青柳肇・酒井厚 1997 アダルト・アタッチメントと回想による幼児期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究 第10巻 p7-p16

Armusden, G.C. & Greenberg, M.T. 1987 The inventory of parent and peer attachment:

Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. Journal of Youth and Adolescence, 16, p427-p454.

栗津幹子・中西由里・小嶋秀夫 1993 育児期の女性の心理に関する縦断的研究(3) —妊娠中の「養護性」や「対人関係」と出産後の社会的支援体制に関する意識との関連から—日本発達心理学会第4回大会発表論文集, p307

Fogel, A.D. & Melson, G.F. マルカンピン美鈴 (訳) 1989 子どもの養護性の発達 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣 p170-p186

George, C., & Solomon, J. 1996 Representation models of relationships: Links between caregiving and attachment. Infant Mental Health Journal, 17, p198-p217

George, C., & Solomon, J. 1999 Attachment and Caregiving. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), Handbook of Attachment. Guilford p649-p670

井森澄江・岩治まとか・清水宏子・大井京子 2004 青年期女子の養護性の発達(1) 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, p376

井森澄江・大井京子 2006 養護性と親子関係Ⅰ 東京家政大学附属臨床相談センター紀要第六集 p23-p35

井上義朗・深谷和子 1986 親になること：現代青年の子ども意識・親意識 小林登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮澤康人編「新しい子ども学 第2巻 育てる」 p71-p94, 海鳴社

伊藤葉子 2003 中・高校生の親準備性の発達 日本家政学会誌 第54巻 第10号 p801-p802

岩治まとか 2005 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文

小嶋秀夫 1995 発達心理学辞典 (岡本夏木ら監修) ミネルヴァ書房

小嶋秀夫・河合優年 1998 幼児・児童における

- 養護性発達に関する心理・生態学的研究、昭和62年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書
- 中西由里・栗津幹子・小嶋秀夫 1992 育児期の女性の心理に関する縦断的研究—妊娠中の「養護性」と「対人関係」に関する意識の分析を中心—日本発達心理学会第3回大会発表論文集, p119
- 中西由里・栗津幹子 1997 「養護性に関する一研究(2) —妊婦と未婚学生の比較— 椋山女子学園大学研究論集第28号（社会科学篇） p81-p89
- 中野由美子・伊藤野里子・谷田貝公昭・村越晃 2004 次世代育成力の形成に関する調査研究(1) —接触体験・保育実習体験が学生の幼児イメージに与える影響— 目白大学人間社会学部紀要 第10巻 p67-p79
- 岡林秀樹・杉澤秀博・高梨薫・中谷陽明・柴田博 1999 在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造と燃えつきへの効果 心理学研究, 69, p486-p493
- 小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究 第14巻 第2号 p180-p190
- 大井京子・井森澄江 2006 養護性と親子関係Ⅱ 東京家政大学附属臨床相談センター紀要第六集 p43-p53
- Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. 1979 A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology, 52, p1-p10
- 酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9, p59-p70
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度; 成人愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, 196, p1-p16
- 山岸明子 1998 成育史に見られる対人関係の質と現在の対人関係の枠組みとの関連〔Ⅱ〕 日本心理学会第62回大会発表論文集, p227
- 山岸明子 2000 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, 12, p31-p46

Abstract

The present study was undertaken to analyze the relationship between nurturance in adolescent women and the parent-child relationship which was elucidated for individual periods of infancy, childhood, high school and university from their life histories. The subjects of the study were 206 female university students. The questionnaire, included questions about nurturance and attachment, and contained questions answered in the text for individual periods, such as “how you have been brought up”, “about which how you have felt”, “what has happened”, and so on.

The nurturance scale was composed of 6 factors was extracted from the questionnaire, and the relationship to parents was estimated by the life histories. Then nurturance was investigated from a viewpoint of the parent-child relationship in the individual periods.

Results were as follows; the students who had a good parent-child relationship in the periods of infancy and childhood showed positive feelings for parents and made a good score on the nurturance scale.

Key words: Nurturance, female adolescents, a parent-child relationship, life history